

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

No.1
2003年4月

今の子どもたちのおかしな現象は、
理解させずにたくさんの方のことを覚え込ませる教育に
その原因があります。

🌍地球となかよしインタビュー
ボランティアアッてなんだろう？ 堀田 力 ②～③

知っておきたい教育NOW ①「学力」から「人間力」へ 市川 伸一 ④～⑤
②いわゆる絶対評価とは？ 渋谷 憲一 ⑥～⑦

有田和正のおもしろ授業発見！ ⑧～⑨

学びの創造「2学期制」 ⑩～⑪

インフォメーション 北から南から ⑫～⑬

BOOK REVIEW ⑭

地球となかよしトピックス ⑮

COLUMN ほっとな出会い 斉藤 仁 ⑯



地球となかよし
インタビュー

ボランティアってなんだろう？

堀田力先生

(弁護士・さわやか福祉財団理事長)

ボランティアとは自分探しであり、自分の生きがい探しです。自分がどういうことをしたら楽しいか、生きがいを感じる人間なのかを発見するために最も適した活動です。

◆今の子どもたちは自己中心的で思いやりに欠けると言われますが、

子どもも千差万別ですから、ひとくくりにはいえませんが、自分を大切にすることができない子どもたちが増えていると思います。自分を大切にすることができないと、意欲が湧きませんし、楽しくありませんから、ストレスがたまります。そのストレスからいじめや非行に走る子も出てきます。非行も、ひと昔前のようにグレて暴力をふるうというのではなく、おとなしかった子が突如人を殺してしまふといったケースが90年代に入ってから出てきました。これも子どもたちが抱える大きなストレスの表れだろうと思います。そして、自分を大切にすることができないわけですから、他人を大切にすることもできません。だから自己中心的な傾向が強い。このあたりがかつての子どもたちと比較した場合の今の子どもたちの問題点だろうと思います。

◆そういう子どもたちの現状をふまえて現在の教育改革の方向性についてどのよう
に思われますか。

今の教育改革には二つの方向性があり

ます。ひとつは、「総合的な学習の時間」の導入など個々の個性を認め、人間性を高めていこうという、今の時代にあった正しい方向。もうひとつは、逆に管理を強化していこうという方向です。この二つの潮流がぶつかり合っていますので、現場の先生方も混乱しています。

かつて高度経済成長期の頃には、おとなしくて言うことを聞いて頭がいい人材が求められていました。しかし、1970年代に高度経済成長を遂げ終え、企業が画一的に追いつき追い越せでまわっていた時代が終わり、社会の多様なニーズに対応していかななくてはならなくなるなど、自分の頭で考え自分で新しい課題を発見し、自分で対策を練って取り組んでいく人物像を求めるようになりました。ところが教育界では依然として、おとなしくて画一的で頭がいい、つまり昔の企業が求めていた人間育成をしています。ですから、社会との間に大きなギャップがある。

教育基本法の改正の動きも教育改革の悪い方向だと思っています。日本の法律で一番いい法律は教育基本法なんです。でも日本の法律で一番実現されていないのも

教育基本法。一番いい法律で一番実現されていないのに、なぜ変える必要があるのか。国家愛ということが言われてますが、教育基本法に盛り込むことではあり
ません。国家愛はどこから出てくるか？

まず自分を好きになる。自分を好きになったら自分の家族を好きになつて、自分が住んでいる地域を好きになつて、仲間を好きになる、それで地域愛が生まれる。その延長にあるものとして国を好きになるのです。国家愛は大事です。でも、自分すら大切にできない、愛せない今の子どもたちに国を愛せよと教えても逆効果を生むだけ。国家愛を育もうというのであれば、まずは自分自身を愛せる子どもたちにしなければなりません。

◆子どもたちの学力が低下したという指摘が、特に大学の先生からなされている

が、学力低下論者は二つの大きな間違いを犯しています。ひとつは、全ての科目ができなければ学力が低いと考えているこ



堀田力先生 プロフィール

1934年京都府生まれ。京都大学法学部卒、東京地検特捜部検事(ロッキード事件等担当)、法務大臣官房長等を経て、1991年さわやか法律事務所及びさわやか福祉推進センター(現さわやか福祉財団)開設。1996年8月～1998年8月まで教育課程審議会委員。『おごるな上司!』『壁を破って進め』『生きがい大国』など著書多数。

と。それは昔、何でもわかって、企業の言うことを全部理解して従う、高度経済成長期に要求された人間像を頭に置いていたのです。今は全科目できる人間なんて求められていません。

学力低下論者の先生には、センター試験の全科目を受けてもらってみてはどうか。おそらく自分の専門科目でも100点取れるかどうかは怪しい。専門



外だと20〜30点取れるかどうか。なのに子どもたちにはいい点を取ることを要求し、それができなければ学力低下だと言っているわけです。

第二の大きな間違いは、試験ができるかできないかで学力を判断していること。学力低下論者は、試験でいい点を取ったら、子どもたちがその内容を理解していると考えています。今のセンター試験は昔よりずっと程度が高いので、それを解いている子どもたちの学力も高くなっているはずなんです。大学に入ってみたら問題が解けない。なぜなら、子どもたちは試験対策として、理解をせずに答の出し方を暗記しているだけなので、全く身についていないんです。だから、合格した途端に全部忘れてしまう。

子どもたちにとっては、教わるが多すぎて理解している暇がない。そして、理解もしないでただ覚えるというのは面白くない。面白くないから勉強が嫌いになって落ちこぼれたり、非行に走ったり、ストレスがたまっている。今

の子どものおかしい現象は、理解せずにたくさん覚えること。覚え込ませるという教育にその原因があります。

このように、まったく身につかない間違った教育をしているのに、学力低下論者はおもったくさん教えなければいけないと主張し、さらに間違いを重ねようとしています。



◆学校教育の現代的な課題として、福祉・ボランティア教育の大切さが挙げられています。

ボランティアとは自分探しであり、自分の生きがい探しです。自分がこういうことをしたら楽しいか、生きがいを感じる人間なのかを発見するために最も適した活動です。例えば、お年寄りの相手が苦手な人が高齢者のボランティアをいくらやってもダメ。それが子どものボランティアをやったら案外生き生きしたり、お年寄りも子どもも苦手な人は動物に携わると生き生きしたり。人間はやはりそれぞれ個性をもっていますし、やりたいことがあります。仕事は上からあるいは顧客から与えられるものだから、自分の好き嫌いではできませんが、ボランティアは自分の好き嫌いで選べるので、自分が一番やりたいことが何なのかを探すことができます。

聖路加国際病院の日野原重明先生は、80歳の後半になってもなお新しい自分探しをして『葉っぱのフレディ』というミュージカルを作られました。そのように、生涯自分探しをして、自分の好きなことをやれる能力を見つけて出し、伸ばし、楽しんで、生きていくのが、私は人間らし

い、いい生き方だと思っています。

また、社会にとってもボランティアは不可欠の要素です。例えば、教育でいえば、引きこもりになった子どもをどう立ち直らせるのが問題になっていますが、行政や学校、親が立ち直らせることは難しい。また、企業にお金を払ったからといって直るものでもない。でも、子どもの心を開かせるのが得意な人は、その子どもを立ち直らせていくことができます。ですから、社会にとって必要でありながら、行政や企業といった今までの社会のしくみでは行き届かない問題に取り組んでいくのがボランティアなんです。

ボランティア教育で一番大事なことは、子どもたちの好きなようにやらせることです。高齢者の施設を訪問した方がいいが、こうしなさいと先生が指示をしているようでは今までの教育と変わりません。お年寄りの世話をしたい子はお年寄りの施設に行き、幼児の世話をしたい子は幼稚園や保育園に行つて、自分で考えながら実践してみる。子どもたちが自分で選んで自分でやるのが大事なんです。ただ、やりたいと言つて実際に行つてみても、合わないこともある。それもまた子どもの発見です。そんなときは先生が「違うことをやってみよう」とリードしてあげればいいんです。

私が主宰しているさわやか福祉財団では、今、小学生、中学生を対象に「ボランティアパスポート」という取り組みをしています。これは、子どもたちがボランティア活動をしたり、いいことだと思うことをしたら、そこにシールを貼っていくというものです。近所のおじいさんの世話をしたり、障害者のお手伝いをしたり、小さい子どもの面倒を見るとか、何でもいいんです。自分でシールを貼る

ということは自分で自分を誉めること。つまり、自分でプログラムを作つて、自分で実行して、自分で評価することになります。そして30枚貼り終えたら、子どもたちを誉めてくださるよう先生方にもお願いしています。

これを地域の商店街にも協力してもらい、シールを貼り終えたボランティアパスポートを子どもたちが商店街に持って行けば、100円とか1000円とか寄付をしてくれるという仕組みにする。例えば、子どもたちがアフガンの子どもたちに鉛筆を送りたいと決めたら、「アフガン子ども鉛筆基金」といったプロジェクトを作り、シールを貼り終えたパスポートを商店街に持って行つて寄付してもらおう。そのお金で鉛筆を買い、アフガンに送ることができる。こうして子どもたちにとっては、自分たちのボランティア活動が商店街からの寄付につながり、アフガンの子どもに役立てたという喜びや自信につながるわけです。

子どもたち自身がやってみたいと思うプログラムを作り、それに地域の大人が協力していく、そうしてボランティアを発展させていく。これは一例ですが、こういった活動を始めている学校が少しずつ増えています。子どもたちのやる気を引き出し、子どもたち自身に考えさせる仕掛けはたくさんつくれます。先生にもぜひこうした活動を考えていただきたい。総合的な学習の時間も広く発展させていかなければなりません。

◆わが国ではまだ十分定着しているとは言えないボランティアについて、その基本的な考え方と実践の方向性を明快にお示しいただき、ありがとうございます。

教育によって何を育てるか

「学力」から「人間力」へ



東京大学教授 市川 伸一

■新しい学力観

この3、4年ほど、「学力」とは一体何かというところが、学力低下論争の中で問題になりました。私は何を学力と呼ぶかという定義論は不毛だと思っています。それよりも、学力というものには一体どんな構成要素があって、それらはどんな関係にあるのかという議論をする方がはるかに生産的だと考えています。

認知心理学では、人間も一種の情報処理システムだと考えています。耳から言葉が入ってきたり、目から視覚情報が入ってきて、それを記憶したり、思考したりするわけですが、人間がテープレコーダーやビデオと決定的に違うのは、情報を理解してから取り込むという点です。テープレコーダーやビデオは情報を単に電気信号に変えて保存するだけで、内容を理解しているわけではありません。一方、「出力」のときも、人間は日本語に関する知識や、「相手はこういう人だ」という知識を使って表現しています。ですから、知識というのは人間にとって非常に大事です。

それでは、昔からの知識偏重といわれる教育に問題はなかったかといえば、やはり問題はありました。これまで、知識を蓄えることばかりに注意を払って、どれくらい知識が蓄えられたかをテストで試すとい

うことをやってきましたが、実際には、どれだけたくさんの知識を持っているかが大事なのではなくて、持っている知識をうまく使ってどういう知的な活動をするかが重要なのです。また、人間は日常生活において、道具や他者とかかわりながら知的な活動をしています。ところが、これもこれまでの学校ではあまり重んじられていませんでした。典型的なのがテスト場面で、道具を使ってもいけないし、人と相談するなんてもちろん許されません。

しかし最近、総合的な学習の時間の導入などによって、この状況が大きく変わってきています。持っている知識を総動員して問題解決に取り組んだり、いろいろな道具を使ったり、友達と協同で問題解決を図るといった活動も重視されるようになってきました。そういう意味では、これまでの学校教育が偏っていたという反省に立ち、より日常的な問題解決の場面に近い活動がなされるようになってきました。

■「学力」から「人間力」へ

「新しい学力観」という考え方が出てきた頃から、「学力」という言葉が関心・意欲、思考力、表現力など、広い意味で使われるようになりました。次に「生きる力」が出てきてからは、体力や情操までも意味するようになり、さらなる混乱が生じる恐れがあ

りました。そこで、子どもたちに対して育てたい力を広く捉えるためには何か新しい言葉を導入する方がいいのではないかとこの雰囲気教育界にあり、登場したのが「人間力」です。

また、産業界や経済界からも、今の日本経済の不振を立て直すための対策の一つとして、若い人たちに對し、実社会で生かされるような力という意味をこめて「人間力」を育ててほしいという声が出てきました。教育界では社会力や道徳心も含めて「人間力」という言葉を捉えているので少し意味合いがずれていますが、社会の中で役割をもって責任を果たしながら生きていくという、目指すところは共通だと思っています。

一方、厚生労働省はフリーターの増加という問題にあえいでいます。200万人といわれるフリーターがしつかりしたキャリアを積みぬま30代になれば、なかなか職に就けなくなります。このままフリーターが増えていけば、失業者が増え、社会が非常に不安定な状態になるのではないかとこの危惧があります。この問題の原因として、社会の中で仕事をもって役割・責任を果たしていくという気持ち若い人たちの間で薄れていることが指摘されています。こうした背景から、文部科学省、経済産業省、厚生労働省の三つの省庁と、教育関係者、産業界の方たち、労働雇用問題の専門家から構成される「人間力戦略研究会」が内閣府に発足しました。私はその座長として参加しております。

この研究会の担った役割とは、「人間力」という言葉や定義を普及させることではなく、「人間力」という言葉に触発され、これまでの教育像をより広げていくことだと考えています。私自身は、「人間力」とは「人間として社会の中でよりよく生きようとする力」と捉えられるのではないかと考えています。では、「人間力」を育成するためには何をすればいいのか。まず、「人間力」形成のモデルを考えてみました。

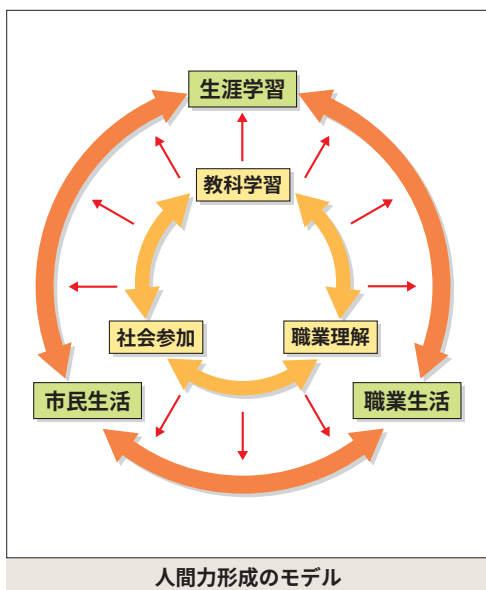


■「人間力」形成のモデル

伝統的な教育は、教科教育を極めた人、つまり学者や芸術家やスポーツ選手をゴールとしているようなところがありました。しかし、人間力という視点からいえば、普通の生活を営んでいる一般市民をモデルとして教育のゴールを考えるべきではないかと思ひ、一般市民の生活の柱を考えてみました。

一つは、学校を卒業してからも自分で知的な刺激を求めて学んでいく生涯学習。それから何らかの仕事をしているので、職業生活。そして、一人の市民として地域活動をしたり、投票に行つて政治に参加するという市民生活。

この三つの柱を目指して教育としては何をすべきかを考えると、まず生涯学習の基礎としては教科の学習。職業生活の基礎としては職業理解教育。これは職業訓練とは異なり、世の中にはどんな職業があるのか、それになるためにはどんな勉強をすればいいのかを知ることや、職業体験も含まれます。市民生活の基礎としては社会参加の経験です。ボランティア活動も含め、地域のいろいろな活動に参加してみ。また、環境、エネルギー、福祉、国際理解な



ど、実際に社会で起きている問題について学ぶ。これまでの学校では、こうした職業教育や市民生活に関することはあまり取り上げられていませんでした。

■「人間力」を育成する実践

「人間力」を育成するために二つのことが必要だと考えています。一つは、総合的な学習の時間の中に進路や職業という要素をもっと増やしていく必要があります。例えば、中学校では、兵庫県の「トライやるウィーク」という実践があります。高校では、福岡県の城南高校の「ドリカムプラン」があります。これは、高校1年のときに、自分の10年後はどうなっていたいか、夢を考え、2年目にそうなるためにはどうすればいいかを取材等を通して調べ、3年目に実現に向けて実践するという構想です。何のために学ぶことが必要なのかということに立ち返って考えさせる、大変すばらしい取り組みだと思います。

もう一つとして、今も夏休みや土日に社会教育的な講座がいろいろ開かれています。自治体や地域、NPO、産業界、民間企業に多様な教育プログラムをもっと作ってほしいということです。学校週5日制になって受講が奨励されていてもまだまだ利用者が少ないので、少し背中を押す意味で、私は今「授業外学習ポイント制度」というシステムを提案しています。

これは小学校5年生から高校3年生までの間に、1時間を1ポイントにして年間40ポイントくらい講座を受けるという構想です。講座を受けるとスタンプがもらえる、学習のスタンブラリーです。講座を受けたら一応学校に届けます。分野としては、教科学習、文化・スポーツ、職業体験など職業生活、ボランティア活動や市民生活、の四つを考えています。このシステムによって、全ての子どもを参加させるのは無理でも、少なくともこれまでついダラダラと

土日を過ごしてしまったような子の中から「やってみようかな」と思う子が出てくれば活性化されると思います。

■「学びの文脈」をつくる

今ひとつの問題は、若い人たちの学習離れです。昔は受験などがあって何とか勉強していましたが、今は少子化になって受験プレッシャーも弱くなり、中学・高校に進むにつれて教科の学習に興味がなくなつて、昔ほど勉強しなくなってきました。そこで、学力低下論者には、受験プレッシャーをもう一度高めればいいのかと主張する人もいます。

しかし、そうやって勉強させても、結局大学に入ったらきれいに忘れてしまいます。それよりは、学んでいることが実際にどう生かされるのかという「学びの文脈」をつくる方が大事だと思います。実際にこれから経験していく職業生活や市民生活をもっと広く子どもたちに見せて、今の学習がどのようにかわっているかを意識させることが意欲の向上にもつながります。ただこれは従来の教科の学習だけでは難しいので、実際に働いている人たちから語っていただきたい。そのために、地域や家庭、産業界も学校に注文するばかりではなく、積極的に協力していただきたいと思っています。

これまでの学校教育は、社会生活と切り離された独自の教育の論理で進められてきたのではないでしょう。社会にはどんな仕事があり、どんな能力が求められているのかということがわかってこそ、自己実現もあるわけです。社会や産業界の求めに応じた単なる人材育成ではなく、社会と切り離された自己実現の論理だけでもない、その両者をうまくすり合わせることは可能です。その橋渡しをするのが「人間力」であり、そのシナリオ作りを人間力戦略研究会で進めています。(談)

いわゆる絶対評価とは？ 教育評価活動の基礎



上越教育大学名誉教授 渋谷 憲一

わが国の教育界では、いま、教育評価に関する議論がさかんに行われている。

学校では「いわゆる絶対評価への移行にどのような対応すればよいのか」という現実に向き合っている。父母たちも評価のあり方が大きく変わったことだけは知っている。しかし、十分にそのことを理解しているだろうか。

身近な問題として通信簿に注目してみよう。明治のころから今日に至るまで、通信簿は学校教育の中で大きな位置を占めてきた。子どもたちの学校生活の様子を父母に伝えなければならない責任があるからである。それ故、通信簿をめぐる誰にも（成績をつける教師にも）いろいろな思い出があるものである。

筆者の友人は、高齢になったいまでも、通信簿を前にして死んだ父親に叱られている夢を見るとこぼしている。

通信簿に記載された評語は、それぞれの時代を反映している。たとえば、甲・乙・丙・丁といった評語の時代には、乙が並ぶと「アヒルの行列」、丙が並ぶと「ヘイタイさんが並んだ」と言われたものである。その後、優・良・可・不可とか、五段階評定（5・4・3・2・1）、そして三段階評定（A・B・C）と通信簿に記載される評語も変わってきている。

このことは何を意味しているか。戦前の主観的絶対評価時代から、戦後の客観的な相対評価の導入、そしていま、「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）の時代を迎えている。

■ 学びの姿をとらえる

子どもたちの学びの姿をとらえるために、各教科の目標に照らしてその実現状況を評価するいわゆる絶対評価は、一人ひとりの児童生徒が目標に対してどれだけ実現・達成しているかを確認し、次の学習への動機づけをしたり、学習結果を診断することによってもたらされる評価情報によって、学習指導の改善に役立てようとするものである。

では、従前の相対評価とどこが違うのだろうか。両者の違いは図1のように示される。

この図からわかるように「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）は、目標に対してどれだけ高まったか、深まったか、その実現状況がとらえられるような縦軸上の尺度を用意する必要がある。この縦軸上の尺度が評価規準である。

これに対して、相対評価は、横軸上の尺度（正規分布にもとづく基準の設定）によって評価してきた。得点の正規分布になることを想定し、上位7%に5、次の24%に4、次の38%に3、次の24%に2、下位

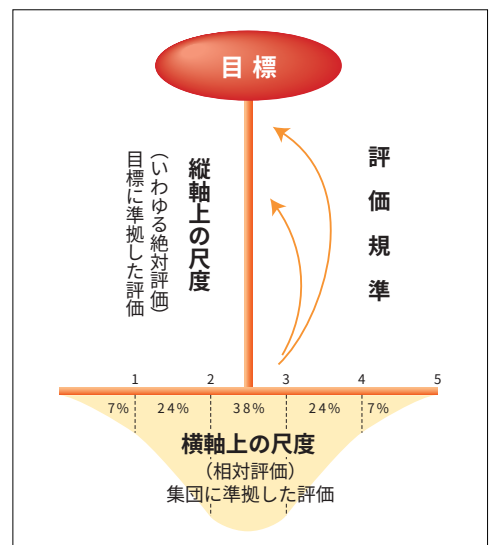


図1 絶対評価と相対評価の違い

7%に1を評価段階として割り当てていたのである。かつて相対評価による通信簿では、父母の声として「うちの子はこんなにも頑張って努力したのに、どうして4から5にならないのか」という苦情を耳にしたのも、実はワクが決められていたからである。だから、いくら努力して良い点を取っても集団的位置が変わらない限り評価段階は変わらず、努力も認められず、学習意欲を低減させてしまう。

このように集団の中での相対的な位置づけだけではなく、一人ひとりの目標を実現している状況や努力の姿をとらえることはできない。極端な言い方をすれば、一人ひとりの児童生徒の顔を覚えていなくてもできる評価活動である。

これに対して、いわゆる絶対評価のとらえ方は、児童生徒一人ひとりと向き合い、基礎的・基本的事項を確実に身に付けているかどうかを直接把握することができ、丁寧な評価活動であるといっていよい。

■ 目標・評価規準を具体化する

こうした「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）の特性をふまえ、これからの評価活動を充実、

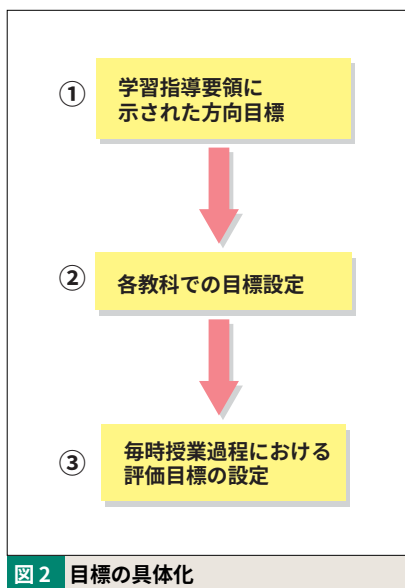


図2 目標の具体化

発展させていくためには、まず目標や評価基準を具体的に明確化する作業が必要である。

目標や内容がおおまかであったり、抽象的であったり、目標の達成や実現状況を正確にとらえることはできない。

では、どのような手順で教育目標の明確化・具体化がなされているか。

図2にみられるように、学習指導要領には、国の方針としての学校教育全体の進むべき方向目標が示されている。

これをよりどころにして各教科の目標が明確化されている。たとえば、算数科では「日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考える能力を育てる」と教科目標を設定している。

しかし、それらの表現は一般的な記述にとどまり、実際の単元や授業の場で子どもたちの学びの姿を評価したり、授業の改善に生かすには、教師自らが目標や評価基準をつくり直さなければならないのである。

次いで、それらの目標をどれだけ達成すれば十分満足、またはおおむね満足と判断するかという評価基準、判断基準を用意しなければならない。

学習指導要領に示す各教科の目標に照らして、そ

の実現状況を観点ごとに評価し、A・B・Cの判断基準を設定することになる。

A……十分満足できる状況

B……おおむね満足できる状況

C……努力を要する状況

教育目標がどの程度達成されたかをチェックするのに必要なのが評価基準であり、判断基準である。

そこで、このような流れを国語科における具体例を取り上げて説明してみることにする。

ここで取り上げる国語科の具体例に関係する部分を学習指導要領から抜き出してみると、「小学校及び中学校における漢字の指導については、現在、中学校修了までに学年別漢字配当表の漢字（1006字）を使い慣れ、常用漢字の大体を読むこととされている……中略」となっている。

そして、学習指導要領における国語科の教科目標は「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」と示されている。

こうした流れをふまえて、毎時の授業過程における評価目標を、たとえば「新出漢字・読みかえ漢字を正しく読んだり、書いたりすることができ」という目標を設定したとき、次のような判断基準を設定しておくといよい。

A……十分満足できる（配当漢字の90%以上が読めて、書ける）

B……おおむね満足できる（配当漢字の80%以上90%未満が読めて、書ける）

C……努力を要する（配当漢字の80%未満しか読めないし、書けない）

このような評価基準、判断基準は、児童生徒の学習状況を評価する目安になると同時に、適切な評価方法を導く視点としての役割をもっている。

縦軸の眼を育てよう

教育評価活動は、教育目標群のよりよい達成のための必須の営みであるとするとき、「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）がいかに大切なことであるか理解されよう。

目標に対してどれだけ高まったか、深まったか、その実現状況をとらえようとすることは、まさに縦軸の眼をもつということである。

横軸の眼に慣れ親しんできた教師はもちろんのこと、父母たちも縦軸の眼を育てていく必要がある。

さらにふみ込んでいうならば、保護者や地域住民の教育評価活動への参加が求められているといつてよい。

「開かれた学校」づくりに導入される学校評議員制がそうであり、学校評議員一人ひとりがそれぞれの意見を述べるとき、大いに縦軸の眼を育てておく必要がある。

また、縦軸上の眼が育っていないと、教育成果の報告責任（アカウンタビリティ）を果たすことができないことになるであろう。

最後に、教育評価活動の基礎である「目標に準拠した評価」（いわゆる絶対評価）は、次のような3点に配慮することが望ましい。

①まず児童生徒にとっては、どこが十分（達成）で、どこが不十分（未達成）かが分かり、その後の学習活動につながるものでなければならない。

②教師にとっては、自分の支援・指導の見直しを通じて、その後の指導内容、指導方法の改善につながるものが求められている。

③さらに、各学校にとっては、特色ある教育課程の評価を改善の中心的な資料として活用されなければならないのである。



有田和正の おもしろ授業発見! ①

杉浦真由子先生の 地域教材の開発 — 「間口を狭く奥行き深く」

教材・授業開発研究所代表 有田 和正

1. いい授業に出会うのは至難の技

平成14年中に、719学級の授業を参観した。あるときは1時間じっくり、あるときは駆け足で1時間に20学級も見ることあった。

これだけ見ても、印象に残り、記憶に残る授業は数えるほどしかない。身を乗り出して見る、足が止まって次のクラスへ進めない、といった授業にはなかなか出会えない。

たった1題の簡単な計算問題を1時間の間に解決できない授業をいくつも見て、指導技術がものすごく低下していると思った。

中学の社会科で、正答を出したらものを食べさせるのを見て、あきれてものがいえなかった。「専門性はどこへいった?」といいたい。

学力低下が問題になっているが、この最大の原因は教師の指導技術の低下ではないかと考えられる。

こういう現状の中、時には「これはすごい!」という授業に出会うことができ、うれしくなることもあった。自分が飛び込み授業をして、すごい手ごたえを感じたクラスもあった。5年生なのに、中学1年くらいの実力のある子どもが何人もいるクラスに出会ったとき、「日本も捨てたもんじゃないぞ!」といった気分になった。「いい授業」というのは、教科には関係ない。

2. 絶品! 杉浦真由子先生の授業

愛知県碧南市の杉浦真由子先生の授業は、忘れようとしても忘れられない授業である。先生は新川小学校から大浜小学校へ転勤になり、いきなり6年生の担任になった。

子どもを見ると学習技能はほとんど育っていない。まともなやり方では学習技能は育たないと考えた。

先生は、大浜校区を徹底的に歩き回り、地域に寺が23もかたまってあることを発見した。調べてみると実に深いわけがある。これなら「間口を狭く奥行き深く」の教材にできそうだと考えた。

地域教材をどのようにして開発すべきかは、前任校の新川小できっちり学んできている。面白いことから、ゆっくりと時間をかけて本格的なことへ追究が進むように考えた。

(1) 散歩に行こうよ!

暖かくて晴天の日、さり気なく子どもたちを散歩に連れ出す。子どもたちは、「先生、話せる」と大喜び。春らんまんの候である。気分もいいはずである。

おまけに、「散歩だからメモなんてしなくていいよ!」と、いかにも「遊び」らしくやるので、子どもは完全に遊び気分である。

このあたりの子どもの乗せ方は、ベテランだな、うまいなあ、子どもの心理をよくつかんでいるなあ、と思う。

(2) 何か気づいたことは?

1時間ちょっと時間をかけて、何のかんのおしゃべりしながら、寺の集まっている所をさり気なく散歩する。

距離にしてわずか1kmである。この道をゆっくりゆっくり景色を見ながら歩いたのである。勉強らしいことはいっさい口にしないで、ただひたすら散歩に徹した。

教師というのは、先を急ぐ癖があるから、すぐに「ねらい」を口走ってしまう。これをじっとがまんしているところがすごい。

散歩から帰り、一息入れてから、「散歩面白かった? 何か気がついたことがあったかな?」と、ゆっくり切り込む。

あれがあった、これがあったという中に、一致したことが一つだけあった。それは「寺が多くあった」ということである。

「先生は全く気づかなかったけど、そういわれてみると寺が多かったような気がするよね。あなたたち、大したもんだね。よく寺なんか気がついたね」とほめる。

子どもたちは、まんざらでもないという顔で、にこにこしている。にこにこしながらも、「散歩しながらでも何かを見つけることの大切さ」みたいなことに気づき始めている。

つまり、「見る」ということの大切さである。見るということとは、「行為+見る」という形になっていることに気づくのである。

「気をつけて+見る」「数えて+見る」というように、何らかの目的をもって見ることの大切さに、ちょっぴり気づいている。

(3) 寺はいくつあったの?

「ところで、寺はたくさんあったというけれど、いったいいくつくらいあったの?」とそろそろ本格的な問いを始める。

「数えるの忘れた。今日調べてくるよ!」「無理しないことね」と教師は逆のことをいう。こういわれると動き出すのが子どもである。帰りに歩き回って数を調べる。

それだけではない。道の向こう側とこちら側に分かれて手分けして調べることに気づいた。しかも、「メモの必要性」にも気づいたのである。すぐ忘れるので、何度も調べなくてはならないからである。

「先生、23もあったよ!」と翌朝報告する。「えっ? 23もあったの? 本当かな?」とゆさぶる。子どもたちはメモを見せながら間違いはないという。

先生は「メモ」を見て、「さすが6年生。ちゃんとメモしてるのね。すごい」とオーバーにほめる。子どもたちは大喜び。

(4) 寺はどこにあったの？

「よく調べたね。手分けして調べたなんて、並の子にはできないことね」と、ほめてほめてほめまくる。乗せ方がうまい。

「もうひとつ聞きたいけど、その23の寺はどこにあったの？」と問う。子どもたちは、「しまった！それを調べるの気づかなかった。今日調べよう！」ということになり、またまた同じ道を歩きながら、どこに何という寺があるか、今度は地図をかくのである。

記録、それも数だけでなく、「位置」も大切なことに気づくのである。つまり、「地図の必要性に気づく」のである。

子どもの調査した地図を見て、教師はどんどん成長していく子どもににんまり。子どもに力がないのは、鍛えられていないからである。ちょっと示唆すれば、これだけ調べるではないか。しかも、メモのしかたにしても、どんどんグレードアップしている。

力が十分ついていない子どもには、杉浦方式がとてめいいと思う。ゆっくりゆっくり、ほめながら気づかせていく。

子どもたちの調べた寺の位置を、教師のかいた大きな地図に記号で記入していく。1本の道路に沿って23寺がひしめいていることが一目でわかる。

(5) 距離はどのくらい？

「寺が集まっていることがわかったけど、このはしからはしまで、どのくらいの距離があるの？」

「しまった！そのことに気づかなかった！もう一度調べよう」ということになり、何と「歩測」で調べ、約1kmということをつきとめる。子どもから「しまった！」という声が出るあたり、完全に夢中になっていることがわかる。

(6) どうして寺が集まっているのか？

わずか1kmの距離の中に23もの寺が集まっている。これには何かわけがありそうだ、と予想する。

はじめに出た予想は、「死人の多い町」ということだった。ここだけ死人が多いというのはおかしいということで、住職などにたずねてまわることになった。

市役所、図書館、古老などにもたずねる。

その結果、「家康の恩返し」という思いもかけないことが出てくる。

1582年、本能寺の変が起こった。この時、家康はわずかの家来を連れて堺へ遊びに行っていた。明智光秀はすぐに家康を殺すべく刺客を堺へさしむけた。

家康はこのことを知り、伊賀の忍者の手引きで山を越え、海を越えて碧南の大浜にやっとのことでたどりついた。寺へ食料と宿をたのんだ。貧しかった寺は村へ食料を集めるようにたのみ、家康へ麦ばかりの食事を与えた。そして、岡崎城へ送り届けた。

家康は大そう恩に感じて、後に寺を一か所に集めて保護した。このため23もの寺が一か所に集まっていることがわかった。

身近な寺調べから、日本歴史が見えてきた。

(7) 岡崎の町も寺が多いか？

子どもたちは、碧南市の大浜に寺が集まっているわけがわかり、感動した。「わが町に歴史がある」と。

では、家康の本拠地・岡崎も寺が多いかと子どもの追究は進む。

保護者に車で連れていってもらったり、市役所に電話したりして調べる。その結果、城の西は矢作川、南は乙川という大きな川で守られ、東と北に寺が何百もあることがわかり、「碧南と同じだ」「家康は寺を大事にする人だ」「いや、寺を利用して城を守っているのだ」といったことが見えてきたのである。

この頃の子どもは、調べることに自信をもつようになっていたという。

(8) 江戸の町にも寺が多いか？

岡崎から江戸へ国替えになった家康は、江戸の町にも寺をたくさんつくったのだろうか。と、ついに江戸まで調査の手をのびした。

江戸城の南は海、東は上野を中心にたくさんの寺、北は文京区・新宿区も寺ばかり、西は港区・品川区も寺々と、城のまわりを寺でかためている。家康を堺から手引きした伊賀の忍者は、江戸城を守るために江戸にまねかれた。「半蔵門」の名が今も残っている。

(1)から順に展開すれば、材料を変えても追試が可能である。すばらしい授業が展開できる。

いい授業というのは、追試が可能である。だから、「いいものは広まる。広まらないものは存在しない」のである。



●大浜のお寺(称名寺)にある徳川家のしるしを調べている子どもたち



●徳川家康に関係あるお寺の1つ、清浄院で、家康との関係を説明している子ども

学びの創造——「2学期制」

仙台市教育委員会教育指導課

2学期制は、完全学校週5日制によって減少した授業時数を確保するとともに、特色ある学校づくりを推進するために、全国的に導入が進められている。教育新聞が今年2月に行ったアンケート調査によると、15の都府県の市町村で来年度より2学期制を導入することを検討している（別図参照）。

全国に先駆けて本年度より2学期制を実施した仙台市における成果と課題…。

1 導入にあたっての考え方

本市が学期の見直しを考えた背景には、まず、平成8年の中央教育審議会答申及び平成10年の教育課程審議会答申において、「学校週5日制の下、子どもたちゆとりの中で生きる力を」、「豊かな人間性、自ら学び自ら考える力、基礎・基本の確実な定着」等が打ち出されたこと、次に同年に学校教育法施行令の一部が改正され、「学期」が、その学校を設置する地方公共団体の教育委員会が決定できるようになったことがある。

本市では、子どもたちと教師がしっかりと向き合い、充実した触れ合いを通して、個別指導や繰り返し指導、実生活との関

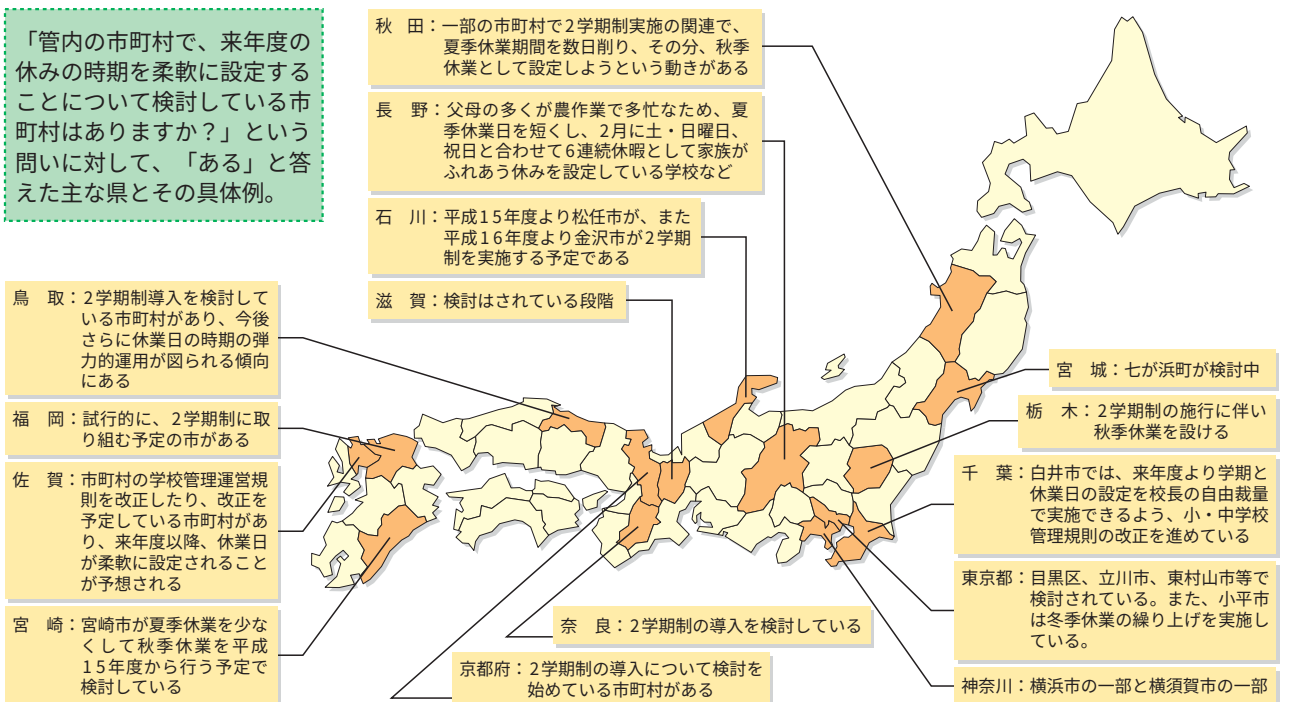
連を図った体験的な学習や問題解決的な学習などが実践されることで、教科等の基礎・基本の確実な定着とともに「生きる力」の育成が図られると考えている。

2学期制の導入は、学校生活の中にあるような学習を展開するために必要な「時間的・精神的ゆとり」を生み出し、教師と子どもたちの触れ合いを基盤とした教育活動をより多く実現するための一つの方策である。

2 なぜ2学期制なのか

2学期制を実施するには、単に一年間の区切りを変えるのではなく、各学校が教育課程全体にわたって見直し、学期ご

「管内の市町村で、来年度の休みの時期を柔軟に設定することについて検討している市町村はありますか？」という問いに対して、「ある」と答えた主な県とその具体例。



別図 2学期制の導入を検討している都府県



2学期制による年間の日程

●学期

- 1学期 ― 4月1日から
10月の第2月曜日まで
2学期 ― 10月の第2月曜日の翌日から
翌年3月31日まで

●長期休業日

- 学年始休業日 ― 4月1日から
同月7日まで
夏季休業日 ― 7月21日から
8月25日まで
秋季休業日 ― 10月第2月曜日の
翌日及び翌々日
冬季休業日 ― 12月24日から
翌年1月7日まで
学年末休業日 ― 3月25日から
同月31日まで

とのまとまりや一年間の教育活動の流れを考慮した上で、教育目標の具現化に向けた創意工夫に基づく教育課程を編成していくことが求められる。

これまでの3学期制が長年にわたって定着してきた学期区分のため、保護者にも教師にもこのリズムの慣れが心身に染み着いていることで、新たなリズムに対する戸惑いが生じることは否めない。しかし、完全学校週5日制が実施された今、授業日数を土曜休業が始まる平成4年度以前と比べると40日以上も減少していることに気付く。特に3学期は、「学期」としての機能を持つこと自体が難しいと思う。また、評価が目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）となり、学習の到達度を適切に評価していくとともに、子どもたちのよさや可能性、進歩の状況などを積極的に評価していくことが重要になってきた。さらに、「個に応じた」という点を含めて考えれば、3学期制の短いスパンの中での評価よりも、一つの学期が長い2学期制のスパンの中での評

3 成果と課題

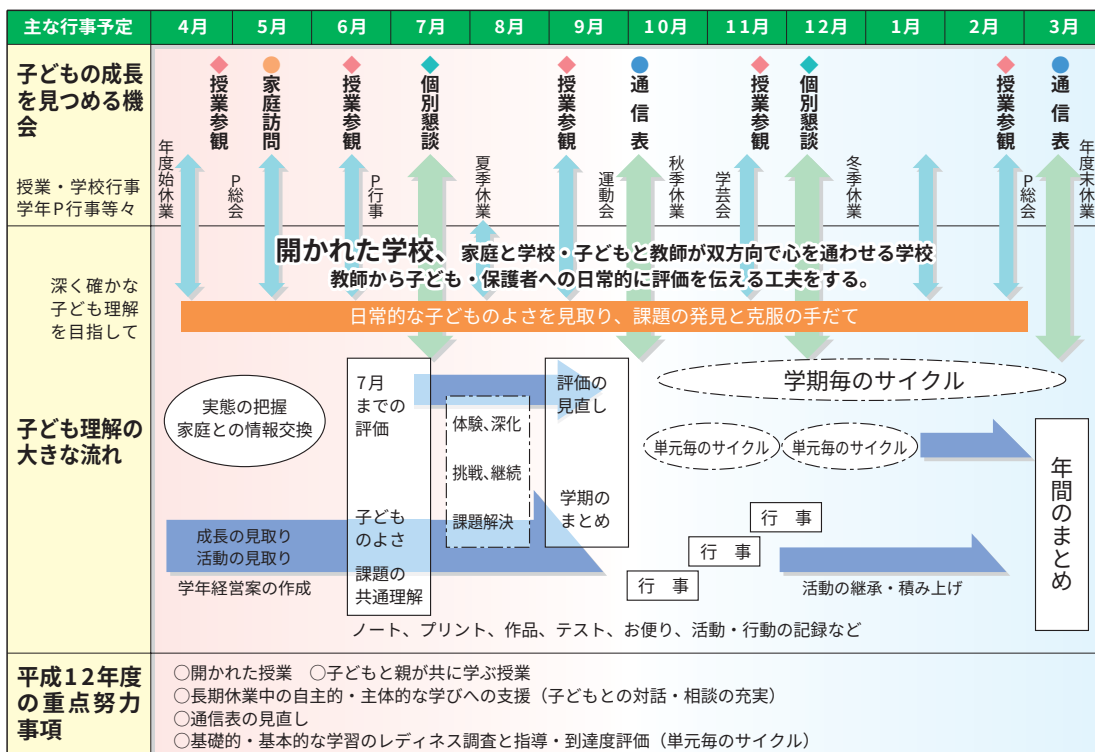
価のほうが、子どもたちの学びの姿を的確にとらえるという点では、より可能性が高いものになると考えられる。

学校現場からは、「学習の進め方に余裕があり、子どもの成長がとらえやすくなった」「学期の長さを生かして個に応じたきめ細かな指導がより可能になった」等の声があがってきている。一方、課題となる長期休業前に通知表がないことへの保護者の心配に対しても、例えば、7月に家庭訪問や個別懇談・教育相談を行った（長期休業中に実施している学校もでてきている）子どもたちの長期休業中の計画等につくりに耳を傾け、一人一人に応じたアドバイスや指導を行ったりすることで不安を解消している学校が多く見られる。

しかし、2学期制を導入しただけでは何の成果も生まれない。各校が自校の教育目標の具現化に向けてどのような教育活動を展開していくべきかという問題意識を持った上で、教職員の英知を集めて子どもたちの学校生活や教育課程全般の見直しを図っていくならば現段階の諸課題の解決はもとより、更なる2学期制の持つ可能性が現実的な姿として見えてくるのではないかと思っている。

へ主任指導主事 高橋 稔

●2学期制の構想図（平成11年 仙台市立東二番丁小学校作成）



北から 南から

■ 東京都 ■

品川区における 小中一貫校の構想

品川区教育委員会教育長
若月秀夫

「学校選択制」を導入し、特色ある学校づくりを進めてきた本区では、保護者や区民のニーズに応え、信頼される公立学校を創出していくことが常に求められている。

こうした流れの中で、小学校、中学校という校種の違いから生ずる子どもたちの心理的負担を軽減するため、これまでの学校教育の在り方や教育内容、方法を新たな視点で見直し、柔軟で継続性のある学校として構想されたのが、この小中一貫校である。

小中一貫校のコンセプトは、「子ども一人一人に適した学び方で学力を伸ばすこと」「自らの生き方を主体的に拓くための知識や知恵を身に付けること」を二つの柱としている。

そして、9年間の教育課程は、子どもの身体的な発達や思考様式、あるいは成長に関わる変化に応じて1～4年生と5～9年生の二つのまとまりで編成し、5年生から教科担任制を導入する。さらに、最後の8～9年生は、学習の自立化を特徴として教科、内容の選択を増やした編成にする。基礎・基本の徹底から徐々に個性・能力の伸長に重点をおいた教育課程に移行するため、習熟度別学習やステップアップ学習など多様な学習集団による教育活動を展開する予定である。

また、現行の道徳と特別活動の内容を見直し、自らの生きる筋道を発見するための教養と社会性の獲得を目指した学習として再構築した新教科を設置し、子どもたちが人間らしい生き方についての自覚を深めていけるようにしたい。

現在構想中の小中一貫校は、平成18年度開設を目指して準備を進めているが、多くの希望者に対応できるよう、今後は区内各地区に開設していく予定である。



■ 北海道 ■

市民も鑑賞する ロビーコンサート

千歳市立北陽小学校校長
今川 勲

本校は平成12、13年度に、石狩教育局学社融合事業推進モデル校の指定を受け、①総合的な学習、②教育ボランティア、③地域との交流、④ボランティア活動の4領域で研究をし、その後も継続して取り組みを進めてきている。ロビーコンサートは②教育ボランティアの活動で、地域に住む音楽家の方々の生の演奏・歌唱を鑑賞することで音楽への興味を高めること、音楽鑑賞時のマナーを身につけることをねらいとしている。ひいては芸術鑑賞へ関心を持つきっかけを作ることを目的としている。通常は多目的ホールで中休みの20分間に演奏を行い、希望する児童が集まり鑑賞している。

第1回目は三味線、ピアノ演奏（出演者2名、参加者200名）、第2回目はオペラコンサート（出演者3名、参加者380名）、第3回目はおもしろ器楽演奏（出演者4名、参加者400名）であった。

回を重ねるごとに参加者も増え、盛り上がりを見せてきた反面、出演者を探すことが難しいという課題も見えてきた。そんな中、本校の保護者が所属する陸上自衛隊第7音楽隊がフルメンバー32名で出演して下さることになった。参加者は本校児童はもちろん、保護者や市民にも広く呼びかけた。当日は一般参加者90名を含め、計700名でふくれあがる会場で鑑賞会が行われ、迫力ある演奏が繰り広げられた。

子どもの感想は「感動した。もう一度来てください」が多く、一般参加者からは「またこのような企画があれば是非参加したい」という意見が多くを占めた。今回の取り組みにより、子どもの音楽への興味を高めるだけでなく、地域と学校が協力するという学社融合の観点からも大きな成果を得ることができた。今後もロビーコンサートを含めて、地域とのつながりを強くしていくことが重要であろう。



■ 福岡県 ■

日韓交流 釜山への修学旅行

福岡市立平尾中学校校長
平本優八

21世紀に入り社会の激変が予想される現在、本校は特色ある学校づくりの一環として、総合的な学習の時間を中心に国際理解教育に重点をおいて取り組んでいるところである。例えば、職場体験学習や韓国釜山への修学旅行、外国人生徒との交流会、あるいは邦楽鑑賞会等を行っている。

本校では、2年前から韓国への修学旅行を実施している。事前に韓国語の学習や文化・歴史の学習をしたうえで、釜山市にある光武女子中学校を訪問し、同校の中学生との交流を行っている。同校とは、その後もEメールや翻訳機能付き電子掲示板などを通じて頻繁にやりとりをし、友情を深めている。

さらに、希望生徒には夏休み期間を利用して、同校の生徒宅でのホームステイを実施している。また、逆に光武女子中学校生の受け入れも行っている。

それらを通して、広い視野をもった人間性をはぐくみ、国際社会をたくましく生き抜くグローバルな生徒の育成を目指している。

このような日本や他国の文化の理解を図る活動を進めることにより、生徒たちには自国の文化の良さに気づき、他国の文化を理解し尊重できる態度が芽生えてきた。さらに話し合い活動や調べ方学習を通して、自分の考えを自信をもって述べ、相手を尊重することができるようになってきた。その結果、交流会でも自信をもって発表したり司会をしたりする頼もしい姿が見られるようになった。

実際に外国の文化や情報に接する活動を進めることにより、国際社会の一員として自分の生活態度を見直し、国際社会に積極的に貢献できる生徒が少しずつ育ってきていると思われる。



■ 静岡県 ■

富士山を心に生きる子を 育てる富士山学習

富士宮市立東小学校校長
近藤しげ子

「来年またお会いしましょう」「さようなら」「さようなら」。

進行役の小中学生4名がステージから手を振ると、わきあがる拍手の中、第5回富士山学習発表会ステージ部門が幕を下ろし、会場内のざわめきは展示会場の方へ移動していった。

本市の富士山学習は、平成10年度に市重点施策として市内全小中学校の取り組みがスタートした。5回を数える発表会は各学校が自校の取り組みを見つめ、まとめをする絶好の機会となっている。

富士山学習は、富士山のあるまち・富士宮で展開する地域学習であり、子どもの知りたい、学びたいという強い学習意欲がその推進力である。

保護者は「わたしたちの生まれ育った富士宮にこの子たちが次の世代で活躍してくれると思うと胸がいっぱいです」「これからの日本に不安だらけの今、こんなにすばらしい子どもたちがいるのかと思い、うれしくて涙が出ます」と感想を伝えてくれる。また、「富士山のあるここならではの発表会に感動しました。ずっと未来までこの企画が続いていくことを願っています」等の声も届く。

子どもたちは自分の足で歩きながら、調べたり地域の方々に教えてもらったりして疑問を解決していく。自分の手で得た学習成果には喜びと誇りがある。ステージにおける子どもの表情や張りのある声は、正に骨太の学力の一端となって発信されていると実感する。

東京学芸大の児島邦宏教授は今回の講評の中で、「(富士山学習は) 子どもたちが鳥や草花、地域をつくってきた人々の暮らしに心を寄せてきたしなやかな学習である」と述べておられる。富士山のふもとの総合的な学習として6年目を迎える今、子どもの柔軟な学習視点に期待しながら、新たな一歩に力を込めたい。



市川伸一『学力低下論争』(ちくま新書)

論争を俯瞰するたくみな整理

評者 新井郁男(放送大学)



学力低下が論争化して三年たった。論争にはあえて加わらずにいるうちに、論は沈静化してきた。この辺で論争を整理し、あらためて、どうすればよいのかを考えてみなくてはならない、と考えていた。評者も、資料などの収集には努めてきたが、次々に登場する論を追いかけることに精一杯であった。同じく、という方が恐らく多いことであろう。

そういう意味で、本書はタイムリーであった。市川氏は、「学力低下」にかかわる賛否両論を、ほぼあますことなく取り上げ、整理している。氏は「どこかバイアスのかかったまとめ方になってしまった」と述懐しているが、だいたいバイアスのかからない整理なんではある。

氏は、論争に登場する論者たちを、「学力低下」について憂慮か樂觀か、教育改革路線に賛成か反対かという二軸によって、賛成・樂觀派、反対・憂慮派、賛成・憂慮派に分類し(氏は賛成・憂慮派)、三派間の主張の相違

派内の相違、それぞれの立場の背景などを考察している。心理学者として、論者たちの心理を読んでもいる。読んで見て、さすが、というのが感想である。

しかし、終章「みのある教育に向けて」については、ちょっと残念である。これは、どうすればよいのかなどについての持論を展開したものであるが、内容は、雑誌などに書かれた論が中心である。論の内容自体は、評者も、「はいまわる脱正解主義」というひとことを書いたこともあり『内外教育』一九九九・四・二七、知識の重要性を強調する市川氏の考え方に共鳴しているのであるが、残念の感を抱いたのは、「どうすりゃいいの」についても、多くの教育論や実践を整理してくれているのでは、という期待をもっていたからである。

ともあれ、これまでの学力低下論争を俯瞰し、論争脱出の糸口を見いだす上で、本書が格好の著であることは間違いない。

佐川光晴『縮んだ愛』(講談社)

ミステリアスで不条理な結末

評者 鶴井通眞(関西外国語大学)



障害児学級のベテラン教員・岡田が、かつて彼の教え子の障害児に暴力をふるいうやむやのうちに姿を消していた若者・牧野に再会する。そこから物語は始まり結末まで鍛錬された文章力で読み手をひきつけて放さない。

牧野と再会した岡田は、妻子に逃げられたとでもいうか、宗教にはまった妻子が聖地に赴いた留守宅で一人暮らし。結婚からわびしい現況にいたるまでの過程が痒いところに手の届く行き届いた文章で肉感的に、退嬰的に語られて行く。

再会以来アラバスク模様をびっしり飾った部屋のある岡田の家に足しげく通う牧野は、生活の根拠を失った根無し草で、まるで昼間は墓に眠り夜な夜な人を訪ねる牡丹灯籠のヒロインのようにはかない。それでも二人の親交はそれなりに安定し始め、この先岡田は、仕事と家庭と牧野とのつきあいの三つの世界にどう折り合いをつけるのかと余計な心配をし始めた矢先に牧野は誰かに襲われ植物人間に。

そこに岡田の妻の香子が旅から戻りただならぬ形で事件に介入する。そしてミステリアスで不条理な結末へ。

まるでオカルト小説を思わせる登場人物と舞台設定だが、オカルト小説のおもしろさはむしろ、ちまちました現実や理屈をひとまたぎにする超常的な筋運びにこそ求められよう。その点でもこの物語は申し分ない。ベテランの障害児教育者の、現実をまっすぐに見抜いたまったくれん味の無い発言は正しさを超えていてまぶしいほどだ。

しかし、それにしても岡田の有無をいわせぬ簡潔に正しい発言と牧野とのつきあいの稚なさのアンバランス。これによるとこの稚気は教育者の作為の偽装だろうか。そうだとすれば、ときに後ろ向きに、しかもともすれば偽善を装わなければリアリティーを得られない教育者の宿命が、かつて「教育」に棄民された生霊死霊の論理であからさまに暴かれているということか。

おもしろいが、結末の途方もなさにはどうしてもついて行けない。

モンゴル教育視察団 教育出版(株)を視察

1月29日、水曜日、モンゴル国から教育関係者19名が教科書の出版事情視察のため、教育出版(株)に来社されました。折しも、当日は、大相撲の朝青龍関が横綱へ昇進することが決まった日であり、私たちにとって身近に感じていたモンゴルへの親しみが一層深まりました。

視察では、日本の教科書制度や編集過程の説明だけではなく、教材品や教育ソフトについても紹介されました。参加されたモンゴルの方々には質問をしたり、実際にパソコンを操作したりして熱心に説明を聞かれました。また、両国の教育事情が異なることもあり、理解しにくい点については、真剣な話し合いが通訳の方を通してあちこちで行われていました。そして、ご紹介やご説明をした私たちもモンゴルの教育事情の一端に触れることができ、大きな財産となったのです。

帰国後も手紙やメールを通して友好を深めることを誓い合っており、真剣な中にも楽しいひとときを終えました。

TOPICS

横綱 朝青龍の国から サイン・バイ・ノー

こんにちは



◆教育ソフトを実際に操作してみる



◆教科書の内容をじっくりと見て話し合う



◆日本の教科書制度や教科書編集の説明に真剣に聞き入る

モンゴル国



首都ウランバートル、人口約253万人(2000年)、平均標高1500mの高原の国。民主化により、学校教育ではそれまでのキリル文字に代わってモンゴル文字が使われつつある。



ぽっとな出会い

SAITO HITOSHI

川野先生の情熱が僕を育てた。

斉藤 仁さん (国士舘大学助教授)

ジャンパー一枚の訪問客

僕は青森の出身なんですが、県大会では柔道や相撲で優勝していました。中学3年の12月の寒いときに、当時、国士舘高校柔道部監督の川野先生が僕をスカウトしに中学校へ見えたんです。それもジャンパー一枚で。ちょうどその2日前に国士舘高校の寮が火事になったそうなんです。」「今青森に行かなければスカウトできない」と思って、非難されるのを覚悟で着のみ着のまま来られたそうです。僕の父がその話を聞き、息子のためにそこまでして来てくれた先生の情熱に心打たれ、僕が校長室の席に着くなり、「仁、おまえ東京さ行け」と言うんです。先生には「息子を一人前にするまで帰さないでくれ」とお願いをして。結局は、そのまま東京行きが決まりました。

一から叩き込まれた川野流柔道

僕の組み手はもと右でした。ところが川野先生から突然、「日本一、世界一になりたいなら、組み手を左に変えろ」と言われました。左に変えれば絶対勝てるという先生の言葉を信じて、左に変えることにしました。僕の柔道は体さばきも基本もなっていない力柔道だったんですが、体が柔らかいから、組み手を左に



ロサンゼルスオリンピック・ソウルオリンピック金メダリスト。現在、全日本柔道連盟男子ヘッドコーチ。

変えて一から仕込めばものになると思ってたそうです。だから、一から無我夢中で覚え直したんですよ。また、先生は寝技の強い選手は立ち技も強いというのが持論で、寝技を徹底的に仕込まれました。僕はロサンゼルスオリンピックの後に膝を故障したんですが、もし先生が寝技を教えてくれなかったら、その時点で選手生命は終わってました。

先生の手紙がもたらした「柔」の心

ソウルオリンピックでは、日本勢は初日から負けが続き、最終日の僕の試合まで金メダルがゼロでした。正直言って、怖くて怖くてどうしようもなかった。日に日に負けがこんでくるし、ましてや當時はもう膝の状態が悪くて昔の豪快な柔

道ができなくなっていましたから。そんな中、試合の前日に川野先生から手紙が届きました。「青森から出てきたことを思い出せ。どん底まで落ちて這い上がってくるまでのことを思い出せ。おまえは自分のやってきたことを信じて」と。膝の手術後、群馬のリハビリセンターにいたんですが、「もういいや」と半分あきらめていて、心が腐っていました。でも一緒にリハビリをしていたおじいちゃん、おばあちゃんたちに励まされて、這い上がってきたんです。柔道選手としての生きていく証って何だろうと考えたんです。僕にとっては、大観衆の中でしびれるほどのプレッシャーと緊張を感じながら青畳の上にあがれることこそ幸せであり、喜びなんだと。

川野先生の手紙を読んだそのことを思い出し、フツと力が抜けました。それまでプレッシャーに押し潰されそうだったのが、「なんだ、俺はこれを感じるために来たんじゃないか」と、うまい具合に開き直れたんです。そのときに「柔能く剛を制す」の本当の意味もわかりました。小さい者が大きい者を投げ飛ばすことではなく、気持ちに柔軟性をもち、どんな相手にも対応する「柔」こそ剛に勝る。翌日「柔」の心で試合に臨むことができ金メダルを取れたのは、川野先生の手紙のおかげです。

— 編集部より —

●米英軍がイラクを制圧しました。メディアは当初こそアメリカに批判的なトーンで国際的な反戦世論の高まりなども報じていましたが、日を追うにつれ詳細な戦況の報道に終始するようになり、人々が抱いたこの戦争への疑問は置き去りにされた感があります。我々の意識の中でもいつの間にか戦争が日常化し、本誌のコンセプト「地球となかよし」も空しく響きます。人類が戦争を根本的に否定する倫理によって、政治や経済の論理の暴走にブレーキをかける叡智を獲得するのはいつの日になるのでしょうか。

●「地球となかよし」社会の実現を子どもたちと一緒に考える取り組みの一環として、小学生・中学生を対象に“わたしの「地球となかよし」メッセージ”を募集いたします。子どもたちが、総合的な学習や自由研究などの成果を生かして、環境問題、国際理解、福祉など21世紀の人類の課題をどのように受けとめ、どのように立ち向かおうとしているのか、大いに注目し、期待しています。先生方から、子どもたちが積極的に応募するよう奨励・ご支援いただきますようお願いいたします。



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていくとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面人間成長に貢献していきます。